

和歌山大学教授 村瀬浩二

和歌山大学教育学部附属中学校保健体育科 流川謙吾・林剛・堂村孝道

はじめに

和歌山大学附属中学校は新型コロナウイルスによる2020年3月の休校以来、オンライン授業に取り組んできた。3月から春休みの間は自由参加のオンライン補習として、4月からオンライン授業として実施した。生徒のいない教室の1つをスタジオとし、4クラス計140名の生徒を対象として配信し、双方向性が確保されるよう配慮した授業を実施した。生徒は、チャットでのつぶやきや質問によってリアルタイムに授業へ参加し、教師はこの内容を拾いながら授業を進める形式であった。この方式では、グループワークや提出物、クイズなども可能である。

本校では現2年生からを全員購入し、授業で使うこととしていた。しかし、本年度はコロナ禍の影響で1年生のiPadが納入されず、全員所持していたのは2年生だけであった。そのため、この時期の遠隔授業は学年によって違いがあった。本研究では各学年の実施事例を検証する。

1年生の実践

4月当初1年生はiPadの納品が間に合わず、課題プリントで対応することとなった。生徒たちが登校できない状況の中、保健体育科として①健康の保持増進、②運動やスポーツの特性や魅力を味わうことができる、③「学び」の保障以上の3点を基準に家庭でできる課題を提示した。単元の選択は、感染症拡大防止のため、個を中心とした単元とし、天候に左右されず、継続して実践できるものとした。そこで、生徒自身のペースで行うことを考え「体づくり運動」の「体の動きを高める運動」を実施した。生徒が自宅でも取り組むことができるように課題プリントに運動ポイントと運動種目を例示し、自身の強度に合うよう回数や移動距離、時間配分を記入・調整、振り返りをできるように配慮した。

生徒の提出した感想には、「股関節の可動範囲が狭いとわかった」「リズム感がないことに気づいた」などポイントに合わせた運動に対して自分の体に気づきに関する記述があり、「運動を考えるのが楽しかった。」や「音楽やメトロノームでリズムをとると効果的だ」など学習に対する感想や工夫に関する記述も見られた。これらの記述から、一定の成果はあるものの授業で説明できないため、課題の内容に対して理解の不十分さも確認された。

その対応として、次は学習用授業サイトを立ち上げ、各運動の説明の記述に加え、生徒発案の運動種目を掲載した。さらに知識の定着を図るため、Google フォームを利用して簡単な小テスト、に質問コーナーを設置し、授業サイトに回答を載せることで学習理解の定着を図った。この小テストは、誰がどれくらい点数を取れたのかをデータで見ることができるよう公開していた。そのため、何度もチャレンジしてくれる生徒が見られた。

2 年生の実践

2 年生の授業は、iPad が全員に導入されていることから、Zoom を用いたオンライン授業によって実施された。担任教員はオンラインでも学校で授業を受ける雰囲気が必要と考えたことから、生徒とのやり取りをチャットやロイロノートで行えるよう配慮した。授業の内容の確認や発問を生徒に問いかけ、実際に体づくり運動を行い、自分自身が伸ばしたい力はどこかを子ども達に問い、教師が運動を示したうえで、体のどの部分を使い、どのような効果があるかを子ども達に考えさせるよう促した。また、ブレイクアウトルームによるグループワークにおいて、それぞれに担当の運動を考えさせ、ポイントを説明しながら実践し、グループ内で共有させるといった取り組みを行った。

またこれらの取り組みに対する評価としてロイロノートによる提出を課題とし、提出物にコメントを記入し返却した。

3 年生の実践

本校には「附中杯」と呼ばれる体育行事があり、例年はその中でダンス発表を行っている。3 年生はこのダンス発表に向け、体育の授業でダンス単元に取り組むことが例年の流れである。そこで、学校再開までの間、オンライン学習によるリズムダンスに取り組んだ。まず、Google Forms を使用し、ダンス授業に関する事前アンケートにおいて、ダンスの振り付けに不安を感じると回答した生徒が約 1 割認められ、その具体的な不安に関する意見を集めた。これらは、通常の授業で見落とされがちな意見を聞き取ることができ、全体の中では埋もれがちな生徒が自分の考えを伝えられるオンライン学習の利点である。特に、体育が得意でない生徒ほど、より具体的に自分の不安を記述していた。これらを教師がまとめ、生徒にオンライン上で公開したところ、生徒から「同じような不安を持つ人がいて安心した」や「こうすれば不安を解消できるのでは」というメッセージが書きこまれ、意見の共有によって、お互いを理解しながら学習を進める意識付けが効果的であった。

この後、生徒は動画共有サイトなどのダンス動画で 8 カウントの動きを作る課題に取り組んだ。しかし、3 年生の生徒は 1 人 1 台の iPad 環境がないため、お互いの動きを見る、教え合うといった同時双方向の取り組みができず、1 人での学習であった。

まとめ

今回の 3 学年の実践は、タブレットの状況によって差異があった。2 年生は双方向型を、その他の学年ではそれを意識しながら今できることを模索する実践であった。本校では双方向性を、チャットやその他アプリを使って実現していた。ICT を介してコミュニケーションすることで、誰もが公平に発言でき、公平な参加機会や評価が与えられる。すると、通常の授業では見逃されがちな、運動の苦手な生徒、発言の苦手な生徒たちも参加できる。このような長所は、教室における対面授業のなかでも活用できるであろう。